
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。無断引用や転載をお断りいたします。
Copyrighted materials of the authors. Works in progress: Please do not circulate
or cite without permission.

新型コロナ感染拡大下における芸能に関する学際的研究

第8回研究会（2023年度1回目）報告

日時：2023年5月21日

場所：AA研304とオンラインのハイブリッド開催

内容：初めに代表者の吉田より、今後のスケジュールなどについて相談があり、出版に向けた話し合いを行う事、また研究会外のオーディエンスも対象としたイベントを企画することについて、おおむね了承された。その後2つの研究発表が行われた。

一つ目の報告では、コロナ状況下で政府からの保護や助成の対象外とされたストリップ劇場を、二つ目の報告では、政府のキャンペーンにも起用されるにいたったアマビエおよび地域の人びとの多大なる支持の元で開催された御柱祭りという対照的な対象についての2つの報告が行われた。取り巻く社会からの排除と包摂という観点において大きく異なるが、ストリップ劇場も、御柱も、それぞれパフォーマーを取り巻く観客や地域コミュニティとの密な関係性の中で、コロナ状況下でも上演や開催を実現していった様子が示された。各報告の概要は以下の通り。

（以上文責 吉田ゆか子）

報告1

「コロナ禍とストリップ劇場——「本質的に不健全」な芸能の現場」

武藤大祐

本発表は、国による持続化給付金等の支給対象から性風俗事業者として外されたストリップ劇場が、コロナ禍の影響を受けながらどのように営業を続けたかを、劇場・踊り子・観客それぞれの視点から検討した。調査方法は主に参与観察と聞き取りである。

まず現在のストリップの上演および興業の形態を概観した後、コロナ禍の経済的影響を試算的にとらえた。その上で、ステージで裸体になる踊り子のパフォーマンスや、10日ごとの移動、および小空間に観客が長時間滞在する傾向など、ストリップ特有の様々な感染リ

スクを指摘した。

続いて劇場の多岐に渡る感染対策を検討した。中でも観客による声援や踊り子へのチップの手渡しの禁止などは、上演全体に質的な差異をもたらすものとして注目される。観察により、そもそもストリップにおける官能や熱気は、単なる裸体の露出の結果ではなく、あくまでも踊り子と観客の相互作用によって醸成され、増幅されている面があると考察した。

質疑においては、ストリップにおける観客のパトロネージの独特さや、長時間滞在する観客にとって劇場がもつ「居場所」としての性格がコロナ禍で鮮明になったのではないかといった指摘に加え、「官能」の概念にまつわる比較文化的研究など、他の芸能分野とストリップの間に接点を見出す方向で様々な議論の可能性が開かれた。またリモートワークが当たり前になっていた状況下でも出演せざるを得なかった踊り子たちの心理など、今回の発表では踏み込めなかった部分についての課題も提示された。

報告2

「コロナ禍を飼いならすーアマビエと御柱祭」

鈴木正崇

コロナ禍下の研究では、芸能や祭りをテーマに多くの論文が書かれたが、類似したものになりがちであった。芸能や祭りの中止・延期・短縮・変形を通して、持続・維持・創造・流用・簡易化・消滅などを考察する内容で、結論が殆ど変わらない。視点を変えた方法を二つ考えた。第一は、コロナ発生初期の緊張に満ちた短期間を焦点化し、ネット妖怪のアマビエの言説と言説の分析からパフォーマンスに至るまでの検討である（2020年3月～2020年7月、最終は2021年3月）。多くの人々の心に安らぎを齎した「アマビエ現象」を通して現代社会を読み解く試みでもあった。第二は、式年で行う大規模な祭事に注目して、長めに時系列で追う方法で、「延期」も「中止」もできない祭りをどのように行うかを主題とした。満6年ごとの式年の祭り、「令和四壬寅諏訪大社御柱大祭」の参与観察を、2020年5月から2023年5月まで行い、危機を乗り越えるドラマとして描く試みを行った。

アマビエは、2020年3月以降、「予言獣」の妖怪としてインターネットを通じて拡散した。江戸時代の瓦版の記録と絵に登場したアマビエは、災害を予言し防御するなら絵に描けという命令を発し、誰でもが表現に参加できる機会を生み出した。愛らしい姿で人々を魅了し、「疫病退散」という新たな機能を付加してネット・ロア（net lore）の主役となり、アニメや漫画を土壌とする美術家(artist)、クリエイター、デザイナーなどを介して拡散した。護符、人形、アクセサリー、お菓子、ストリート・アート、マスクのデザイン等の多様な表象に展開し、最後にパフォーマンスにたどり着いた。能楽師の上田敦史は、上演自粛期間の時間をうまく使って新作能「アマビエ（尼比恵）」を創作した。まさしくコロナ禍で生まれた芸能である。当初は舞台上演ではなく動画配信を考えていたが、文化庁の文化芸術活動の継続支

援事業を受けて公演が可能になり、海辺の夕暮れなどの場と時を選んだ演出を加えて公開され、大槻能楽堂で公演されるまでに成長した。アマビエを妖怪から海神の使いに読み替え、衣装と面を自由に使い分けてコスプレ化した。新作能「アマビエ」の創作目的は「藝能の活性化」で、アマビエが各地に出現し、疫病退散を行うことも大事だと考えた。能という古典的枠組みを利用した創作藝能が、現代アートと連携して新しい文化運動になった。

御柱祭は、寅年の2022年の式年の祭りで、「延期」「中止」の選択肢はなかった。祭りの実施を絶対目標とした御柱祭の担い手が、3年間にわたるコロナ禍の危機を乗り越えていく過程を考察した。基本となったのは、感染防止のための独自のガイドラインの設定である。しかし、祭りを従来と同様に実現しようとする試みは挫折した。2022年4月の「山出し」では、人力からトレーラーに切り替え、木遣りは「鳴く」ことなく、「木落とし」や「川越し」は行わず、有料観覧席は中止して、諏訪地域以外からの観覧者の参観は極力制限された。5月の「里曳き」では、独自の感染症防止のガイドラインに基づき、参加を登録制にし、リスト・バンドを配って万全を期した。外来者の参観は極力制限された。最後の「建御柱」は、完全に外部者を遮断して行われた。御柱祭につきものの藝能である「騎馬行列」や「長持ち」など神賑わいの藝能は、時と場を制限して実施した。コロナ禍下の御柱祭は、観光が制限されたので、「本来の在り方」を取り戻し、巨大な「観光汚染」を見つめ直すよい機会になったという人が多かった。御柱祭が観光化した契機は、NHKの「新日本紀行」(1980年)で、派手な「木落とし」を紹介して以来のことである。今回は女性参加が許容され、女性の木遣りが増えるなど祭りのジェンダーの見直しへの契機にもなった。コロナ禍下での御柱祭の成功は、強靱な諏訪の社会的ネットワーク構成によって支えられたことが要因である。6年ごとの諏訪大社御柱祭と小宮祭御柱の組織、地縁・血縁・社縁(町、村、同族、会社)+知縁、藝能組織(子供～青年。騎馬行列、長持、花笠踊…)、消防団組織(15歳以上。加入の義務化)などへの多次元的な参加の「関係性のネットワーク」が生かされ、「コロナ対策班」「アルコール消毒隊」の結成などコロナ禍に対する独自の対応を生み出して、危機を乗り越えた。「関係性のネットワーク」が、リスクに対する保障になる。コロナ禍下の御柱祭を通して、祭事や芸能を支える組織の強靱さと応用能力の高さが再認識された。